

伝慈円筆『寢覚物語』切の出現

—「斎宮」再考—

田 中 登

一

寢覚物語の伝本は、三巻本といい、五巻本といい、いずれも中間部と末尾とに、大量の欠巻が生じているが、その内、末尾欠巻部の内容をうかがわせる資料としては

無名草子・拾遺百番歌合・風葉和歌集・夜寢覚抜書・寢覚物語絵巻・伝慈円筆大六半切・伝後光厳院筆六半切

などがある。しかして、最後の伝後光厳筆切は、比較的近年になって、寢覚の断簡であることが判明したもので、現在一五葉ほどの切の存在が報告されているが、本稿では、これについての言及は避け、『寢覚物語欠巻部資料集²⁾』に三葉ほど紹介さ

れている伝慈円筆切の新出断簡について紹介することを主目的とし、併せて、斎宮という登場人物について、若干の考察を試みてみる次第である。

二

今回新たに出現した切について、書誌を記せば、大きさは縦が二〇・八センチの、横が一七・九センチで、一面十三行詰。料紙は鳥の子で、書写年代は鎌倉の初期から中期。伝称筆者は、朝倉茂入の極めに、慈鎮和尚となっているが、無論、何か確証があつてのことではない。全文を翻刻すれば、次のとおり（巻末図版参照）。

- 1 申さむかたなければ御心もゆるされてふと申
- 2 いてんもいと、は、かりあれは心はたれか侍らむこ
- 3 とくしき、はの人はおもふによに侍らしとこたへ
- 4 申給へはかのもやにあやしうそらめにやあらむ
- 5 めつらしきさましたる人のふとみえつるはとの
- 6 給ま、になみたのさしくみ給をされはよといみ
- 7 しいとをしければことくきこえまきは
- 8 してやみたまひぬとのはせむさいくうに御たいめ
- 9 むありて心よりほかになからへすこすやうに侍
- 10 れと、をさかりまかるま、にもいふかひなうなく
- 11 さめらる、時のさもなくいよく、心にも、おほ
- 12 えまさられ侍れはかくてもいとなからへにく、
- 13 のとやかにをこなひのかたにおもふきぬへくおもひ

以上のごとくであるが、新出断簡の内容の検討に入る前に、既知の断簡三葉と、新出断簡（これを断簡四と呼ぶ）の物語展開上の順序は、私見によれば、以下（断簡番号は『資料集成』による）のようにならうかと思われるので、話の都合上、断簡二の内容からみてゆくことにする。

断簡二↓断簡四（新出）↓断簡一↓断簡三

三

さて、断簡二は、蘇生後出家して世間から身を隠していた寢覚上を、真砂とおぼしき人物が発見する場面で、これは絵巻の第一図の内容に該当するものであるが、絵巻の第一図の詞書は今は失われて伝存しなので、その意味でも、当該断簡の存在は貴重である。以下の引用は、『資料集成』による。なお、傍線は本稿において、新たに付したものの。

けだかく、しうとくなるさましたり。そのかたはらにそ
 ひてそばみたる人は、わづかに廿四、五におよぶほど、み
 えて、いとわかう、つくしげに、ひたいがみもゆくくと
 ふさやかにそぎかけられたる、つらつき、かたわらめ、い
 ひしらずいみじき人なめりとめもをどろかる、に、わがあ
 けくれこ、ろにかけて、こひしく思ひきこゆるむかしのお
 もかげと、ふとおもひいでらる、心ちして、きりふたがる
 なみだをかきはらふほど、かぜのあら、かにふきて、き丁
 …

3 行目「ゆく〜と」は、おそらく「ゆらく〜と」の誤写であろう。さて、「けだかく、しうとくなるさま」（気高く、宿徳なるさま）をしている人とは、寢覚上にとつては叔母にあたる齋宮のことであろう。この齋宮については、後にまた触れる予定。そして、「そのかたはらにそひてそばみたる人」というのが、わが主人公寢覚上のことと思われる。では、この二人を垣間見ている人物はといえば、断簡四および断簡一にも登場する真砂であろう。この死んだとばかり思われていた寢覚上を真砂が発見するという、劇的な場面が展開している場所はといえば、父入道の住む広沢の邸かと推測される。

ところで、問題となるのは、この断簡二の場面で、寢覚の上はすでに出家していたと、稿者などはみているわけであるが、大槻福子氏は、その著『夜の寢覚』の構造と方法⁴⁾の中で、寢覚上のヘアー・スタイルが尼にはふさわしくないとみて、この時寢覚上はいまだ出家はしていなかったと主張しているのだが、浜松中納言物語巻二の、尼姫君についての描写に、以下、傍線を引いた箇所のように、寢覚上の描写と酷似する場面があることは、この際、注意しておいてよからう（引用は新編日本古典文学全集による）。

昼はさりとも、とうち解け給へるに、姫君言はむかたなうあさましうおぼされて、まぎらはさむかたもなければ、ただうちそばみてみ給へるを見聞こえ給へば、花のにほひも立ちまさりて、あざやかにけ高う、あいぎやうづき給へりし人の髪は、居丈にあらむかし、ゆらゆらとそぎかけられて、五重の扇などを広げたらむ心地して、なほいとたをたをと、あくまであてになまめきて、額髪のはなやかにかれるに、はづれたるつらつき、かたはら目、かくてしも、さまことに、うつくしげなることまさりにけるこそ、と見えて…

この浜松の尼姫君の描写との類似⁵⁾からして、前引断簡二の寢覚上も、この時すでに出家していたとみて差支えなからう。

四

断簡二に見られる劇的な場面からいくほども経ずして、真砂は父内大臣（末尾欠巻部では右大臣）を伴って、寢覚上に面会を申し入れたようである。前述新出の断簡四は、そうした場面

かと推測される。

1・2行目は、断簡の冒頭部なので、意味がとりにくいが、相手の寛大な御心に甘えて、唐突に(母上はこちらにいらっしやいますでしょうか)というようなことを申し出るのも、遠慮されるので、といったほどの意であろうか。

次の「心はたれか侍らむ」は、真砂の発言であろうが、これがまた理解しがたい一文である。そこで、仕方がないから、思い切つて誤写説を導入したい。この部分は本来「こ、は」とあつたものが、「こ、ろは」と誤写をし、そしてある段階で「心は」と漢字が当てられるようになったのではないか。したがつて、この箇所は「ここは、どなたがいらっしやるのでしょうか」といったほどの意味にならうかと思われる。これなら前後の文脈と矛盾はしない。

それに対して3行目で寢覚上は答える(無論物越しにか侍女を介してであろうが)。「しかるべき身分の人は、ここにはいらっしやいません」と。4・5行目で真砂はなおもくいきがる。「あの母屋のところ、不思議なことに私の見間違いでしょうか、尼姿の方をお見かけしましたが」と。それを受けて6〜8行目、寢覚上は「やっぱり見られたのだわ」と、真砂のことがいとおしく思われるので、言葉を濁して、その場は済ましてしまった、

というのであろう。

8行目「とのほ」以下、場面が転換する。この「殿」は真砂の父親、すなわち寢覚上の夫にあたる人物である。彼は真砂とは別行動をとつていて、この邸の住人齋宮と面談し、寢覚上死後の自己のつらい胸中を綿々と訴える。それが9〜13行目にかけてで、「不本意にも生きながらえて、寢覚の死から月日が立つにつけても、心の慰む時もなく、いよいよもつて苦しみばかりがまさり、こんな状態では日々も過ごしく、心のどかに仏道修行の道にも進みたく」と。

結局、寢覚上との対面を果たすことができなかった、いいかえれば寢覚の生存を確認できなかった真砂と内大臣は、悄然としてこの場を立ち去ることになるのだが、ここでも、齋宮が登場することに注意をしておきたい。

五

この断簡四の後を受けるのが、断簡一である。以下にそれを引いておこう。

おもひきこえてしを、中納言のたちつゝきたるなまめか

しき、なつかしき、こまやかなるにほひなど、や、たちま
さりてみゆるを、さまぐとをくなるまでうちみやられ、
人やりならずかなしきにも、「なぞや、わろのこゝろや。
いまはかく思ふべきことか」とせめておほしをちて、さい
宮の御をこなひに御返にいらせ給て、つねよりもをこなひ
あかし給に、君たちのおもかげは、なを身をはなれず。

我ながらゆめかうつ、かとだにこそさめてもさめぬよ
にまどひけれ

御をこなひのひまには、ちご宮のかぎりなくをよすげまさ
りたまふを、こひしく、おほつかなくおもひきこえ給。御
かたみには、かぎりなう思ひかしづき、こへ

この「中納言」とは、真砂のことであるが、「たちつゞきたる」
といい、「やゝたちまさりてみゆる」というのだから、ここには、
真砂のほかにもう一人人物がいることになるわけだが、これは
大概氏も指摘するように、真砂の父内大臣であろう。今回の新
出断簡によつても、そのことは首肯されよう。

場面は、寢覚との再会が叶わなかつた父子が、悄然とこの邸
を立ち去つてゆく後姿を見つめながら悲嘆にくれる寢覚の上の
心中を描く。文中「人やりならずかなしきにも」というのは、

断簡四にもあつたごとく、真砂の申し出を自ら拒否してしまつ
たことをいうのである。「今さらみつとつもない、親子の情
に心惹かれるなんて」と、しいて気をおちつかせようと努める
寢覚上。そこで、齋宮のお勤めの御供（「御返」は「御供」の
誤写か）をして自らも修行に努めるが、心はついつい子供の面
影を追い求めてしまう。歌は「今の自分の置かれた状況が夢な
のか現実なのか、出家をしても、なお、俗世にあつた時のよう
に迷いから覚めないことだよ」といったほどの意か。

「御をこなひのひまには」以下は、本稿の趣旨からはいささ
かはずれるので、言及は避けた。ただ、この「ちご宮」につ
いては、米田明美氏に用意周到な論がある⁷ので、それを参照さ
りたい。本稿としては、この断簡でも、またまた齋宮が登場し
てきていることに大方の注意を喚起しておきたい。

六

以上、本稿では、伝慈円筆切の新出断簡（断簡四）を紹介す
るとともに、併せてその前後に位置すると思われる断簡二と一
とについても、若干のコメントを加えてきた。その際、齋宮と
いう人物の存在について、再三注意を喚起しておいたが、そも

そもこの齋宮とは、いったいどんな人物なのか。これについては、現存本巻四に、偽生霊事件ですっかり嫌疑がさした寢覚上が父入道の広沢の邸に逃げ込んで来た時に、次のように紹介されている（引用は新編日本古典文学全集による）。

昔おはせしかたには、入道殿の一つ御腹の女二宮と申ししは、齋宮にぞ居たまひしかど、代はりたまひにし後、きこえをかす人あまたあれど、ことのほかにおほし離れて、世を背かせたまひにけるが、京の宮も焼けにければ、同じ山水の流れももろともにきこえかはいたまひて、この三年ばかりは、ここにぞおはしましたしける。浅くはあらざりけん御罪も残りあるまじく、行ひすましておはしますを、うらやましく見たてまつらせたまひて、御対面どもあり。

寢覚にとつては父にあたる広沢の入道の姉妹であり、そうした縁で、ここ広沢の邸に住んでいるわけだが、この齋宮、この後にも、現存本で六度ほど登場するが、登場するといつても、寢覚の言動との関連で名前が出てくるというだけのこと、齋宮自身が何かをいったり、したりしたというわけではけつしてない。つまりは、現存本によるかぎりは、いっこうに活躍する

気配を見せていないのである。そんな人物が末尾欠巻部に到つて、俄然活躍の跡を見せるのである。蘇生後の寢覚上を匿つて、出家の志を遂げさせたり、おまけに、内大臣の悩みの相談役になるなど、現存本を読むかぎり、いったいだれが彼女のこの活躍ぶりを予想しえたであろう。

この現存本と末尾欠巻部における齋宮の役割の落差を、われわれはどのように理解したらよいのであろうか。一つは、現存本巻五までで、作者はいったん筆を置き、その後、構想を新たに、末尾欠巻部分を書き継いでいったとみるべきか、それとも、現存本の齋宮についての少ない記述を伏線とし、末尾欠巻部で大いに活躍させた、というのであろうか。もし後者であるとしたなら、現存本巻四の齋宮についての簡単な紹介文の箇所、すでに作者はあの複雑な末尾欠巻部を構想しえていたということになる。

これら一連の断簡に接するまでは、稿者はどちらかというところ、前者の線で理解していたのであるが、今後は、後者の可能性も考えてみる必要が出てきたといえよう。

(注)

(1) 横井孝「夜の寢覚」末尾欠巻部断簡の出現」(『王朝文

学 of 古筆切を考える』(武蔵野書院、平成二十六年)

(2) 田中登ほか『寝覚物語欠巻部資料集成』(風間書房、平成十四年)

(3) 「こひしく」の一語が、『資料集成』では脱落していた。ここに謹んで訂正する次第である。

(4) 大槻福子『夜の寝覚』の構造と方法』(笠間書院、平成二十三年)

(5) このことは、早く拙稿『夜の寝覚』と『浜松中納言物語』の作者』(『平安文学論究第十八輯』風間書房、平成十六年)の中で指摘した。

(6) 注(4)に同じ。

(7) 米田明美『夜の寝覚』末尾欠巻部復元「ちご宮」について二説』(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』第四十三号、平成一九年)

(8) 赤迫照子『夜の寝覚』の斎宮―「伝慈円筆寝覚物語切」一葉を糸口に―』(『古代中世国文学』二十三号、平成十九年)

(9) 斎宮の存在に注目した論に(8)の赤迫論文がある。

(たなか のぼる／本学教授)

